



TITLE:

共進化アプローチから見る過少利用問題ー日本の里山とベトナム農村の事例からー(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

竹内, 亮

CITATION:

竹内, 亮. 共進化アプローチから見る過少利用問題ー日本の里山とベトナム農村の事例からー. 京都大学, 2018, 博士(経済学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20872>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（経済学）	氏名	竹内亮
論文題目	共進化アプローチから見る過少利用問題 —日本の里山とベトナム農村の事例から—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文では、日本の農村環境において問題となっている自然資源の過少利用問題について、日本の里山の変遷とベトナム農村の事例にもとづいて共進化アプローチから考察が行われている。</p> <p>1章、2章では経済学における生態系の研究を俯瞰することにより、自然資源の過少利用問題の理論的な位置づけが整理される。過少利用という新たな環境問題を適切に扱うためには、自然を単なる量的かつ抽象的なものではなく、質的かつ実体を持つ生態系として捉え、生産のみならず生活の基盤として機能していることを認識する必要がある。経済学を基盤とする従来の理論では、希少性を持つ資源が研究対象であり、その利用を制限することが焦点であった。過少利用問題を扱うためには、その前提から脱却し、社会経済の活動により生態系が豊かになるといった事実を組み込む必要性が指摘される。</p> <p>3章では、従来の理論の課題をふまえ、生態系と社会経済の複雑なシステム間で発生する過少利用問題をとらえるための枠組みとして、共進化アプローチが紹介されている。共進化アプローチは、生態系と社会経済の連続的な相互作用を正のフィードバックとして連続的にみるものである。共進化アプローチは、自然資源へのアクセスおよび利用そのものに、自然資源への更なる需要の増加、社会経済と生態系の相互作用の改善による福祉向上の動力を見出す。そのため、新たな資源利用の創造という課題である過少利用問題への接近方法として期待される。</p> <p>4章では、日本の里山を例に、過少利用問題が単なる自然資源利用の多寡ではなく、社会経済と生態系における構造的な問題であることが確認される。先行研究では、過少利用問題の発生は、石油製品や外材輸入といった外部からの影響と直接的に結びつけられていた。しかし、過剰利用の中で形成されてきた資源へのアクセス制度の硬直にもその一因があったことを指摘する。里山における過剰利用から過少利用への変遷は、地域における生態系と社会経済の共進化の断絶であった。発生した過少利用の構造は固定されたものとなり、里山資源への新たなアクセスおよび利用は内発的には形成されにくい。そのため、資源へのアクセスおよび利用を促す外部からの働きかけが必要となる。</p> <p>5章から8章では、高度経済成長下にあるベトナムの農村において、将来的に過少利用問題が発生する可能性についてベトナム北部での現地調査から考察が行われる。日本においては、高度経済成長期における家庭でのエネルギー利用の変化と農業事情の変化が、過剰利用から過少利用への転換のきっかけとなっていた。調査からベトナム農村においても、家庭燃料の切り替えや伝統的な自給的農業の変化が確認された。調査地において、共進化により発展してきたバイオマス利用および資源循環的な自給的農業はいまだ活発に行われているが、変化の分岐点にあり、日本と同様の過少利用問題に陥らないために留意する必要がある。</p> <p>9章、10章では、生態系と社会経済の共進化を再構築するための政策的方向性として、自然へのアクセス権の見直しと地域における再生可能エネルギーの展望が結論として紹介される。一度断絶した、地域における自然資源へのアクセスおよび利用を通じた共進化的発展の再構築のためには、外部からの刺激が必要となる。外部からの刺激としての政策には、トップダウンかつ演繹的デザインによる一律的なものではなく、現在、萌芽している地域の自発的な取り組みを促進し、自然資源へのアクセスおよび利用の入口となるようなものが求められると結論づける。</p>			

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、農山村における里山を対象に、資源の過少利用が引き起こす環境問題を分析し、それを解決するための手法について、日本とベトナムの比較研究から示唆を引き出している。経済学ではこれまで、希少資源の最適配分を分析対象としてきたため、資源が過少利用となるケースは、経済学の分析対象とすらなっていない。しかし現実には本論文が明らかにしているように、資源の過少利用が、かえって環境悪化を引き起こし、自然災害すら引き起こしているケースがみられる。

こうした問題が生じるのは、原生林のように自然が、人間のまったく手を触れない状態にあるのではなく、里山のように、人間が自然に適度に手を入れることによって生態系が保たれているからである。つまり、適度な利用が生態系の保全をもたらしている場合、過少利用は生態系のバランスをかえって崩してしまう。

そこで本論文は、人間・社会と自然を別物として対立的に捉えるのではなく、両者が相互に依存しつつ、影響を与え合って進化していく「共進化」という理論枠組みで問題を分析するのが有効だとして、それを理論的基礎に据えて資源の過少利用問題を取り扱っている点に、第1の意義がある。

第2の意義は、日本とベトナムを対象に、なぜ過少利用が起きるのか、それが起きるとどのような問題が具体的に起きるのかを丹念な調査によって明らかにした点にある。日本については、江戸時代以降の里山利用に関する歴史的資料に基づいて、江戸時代には過剰利用されて山林が過剰伐採されるなどしたことから、洪水など甚大な災害が起きていたこと、それに対して入会地が設定されて厳密な資源利用ルールが形成が行われてきたことが説かれる。しかし、エネルギー源の石油への転換が起きたことで、逆に山林は資源の過少利用に陥ってしまっている。

他方、著者が複数回ベトナムにわたって現地調査を行った結果に基づいて、ベトナムの農山村における資源利用状況が明らかにされ、徐々にエネルギー転換によって日本と同様の過少利用問題が生じるリスクが指摘され、バイオマスや小水力など、ベトナムの自然をうまく利用する形で再生可能エネルギーにエネルギー転換することで里山の資源利用の最適化を図る方が示唆されている。

他方、審査では、(1)環境経済学の観点だけでなく、農業経済学や林業経済学の観点からの研究蓄積を活用すべきこと、(2)日本の過少利用問題と同じ原因で、ベトナムの過少利用問題が生じているのか、(3)「里山」を実体に即して類型化するとともに「里山」概念の精緻化を図るべき、といった分析上の課題も指摘された。

以上の課題にもかかわらず本論文が、日本とベトナムにまたがる実証研究を通じて新たな貢献を成し遂げた点を高く評価すべきだという点で意見の一致をみた。よって、本論文は博士(経済学)の学位論文として十分価値あるものと認定する。また平成30年2月5日、論文内容に関する口頭試問を行った結果、合格と認めた。